補聴器を買った

芦別市医師会
勤医協芦別平和診療所　伊藤義雄

私は生まれつき右耳が全く聞こえない。でも可能ならいつも人々の右端に立ってそれでたいてい不自由なくなんとかなってきた。左耳を枕につけると少しぐらいうるさい環境でも自分の世界に没入でき眠ることもできる。狭い炭鉱長屋、９人家族で育った私は片耳しか聞こえないのも悪くはないとしばしば思った。だがレコードを聞くようになってこの世界にモノラルとステレオがあって自分にはその違いがわからない。わからない世界にあこがれた。このように少しのハンデがあったため昔から聴力に関心があった。70歳を過ぎた頃から聴力の衰えを自覚するようになった。診察室では困らないが会議等で若い職員の発言が聞き取れないことがある。TVドラマでは字幕のないものは敬遠しがちである。耳鼻科では周波数の高いエリアで少し聴力が落ちてきていますがまだ補聴器はつけなくてもよいでしょうとのこと。しかし聞き取れない場面が増えていること、若いとき感激したクラシックの曲を聞いても最近はそれほど感激しない、慣れのせいなのかもしれないがもしかしたら高音を聞けていないためではないか、補聴器で補正したら若いとき聞いた音をまた味わえるのではないか、などなど考えて補聴器を購入した。初めて装着した日、どこかで紙をくしゃくしゃたたむ音、車のロードノイズ、鳥の鳴き声、ああこの世はたくさんの音で満ちていたのだなと思った。久しぶりに音の世界に感激した。

それから２か月、朝のミーティングには必ず装着している。発言をほとんど聞き取れている。これだけでも買って良かったと思う。鳥や車の音は初めてつけた日ほどではない、聞こうと注意しなければ音はそんなには聞こえるものではないと改めて思った。クラシックはバイオリンの弓が弦にタッチするときの音など生々しく感じる、外して聞くと柔らかな落ち着いた音に変わる。一長一短だ。両方味わえて興味深い。

年をとると耳の遠い人が多い。難聴の大部分は老化でないかと考えられる。でも個人差が大きい。その個人差はどうして起こるのであろうか。生活習慣病の一種でないかと思いついた。難聴は社会との交流を阻害し認知症の一因ともなるだろう。食事、運動など今まで以上に気をつけ聴力を大事にしよう。それに一日のうち何分かは聞くことだけに注意を払う時間を作ろうと決意した。

開業にあたって思うこと

江別医師会
江別市立病院　近藤太郎

42歳の今秋、江別市は野幌にて親のクリニックを継承することになった。この業界ではよくある話だ。一方で継承者不在によるクリニックの閉鎖、譲渡。これもよく聞く話だ。

当院は日本国内初の酪農専門大学となる酪農学園大学が開学した1960年、同じ江別市に祖母である近藤文子により開設された。祖父淳一は眼科に併設した産婦人科クリニックを営んでいたらしい。高度経済成長期のど真ん中、どのように診療していたのだろう。そして、働きながら父をどのように育てていたのだろう。苦労が絶えなかったに違いない。私は日本全土がバブル景気に沸いた1980年代末に小学生だった。両親は仕事で忙しい中、夏休みと冬休みは必ず海外旅行に連れて行ってくれた。L. A. のディズニーランドや発射前のスペースシャトルを見にフロリダのケネディ宇宙センターに行ったことが懐かしい。現在の自分にはそこまでの余裕がなく、家族サービスは疎かになっている。私はまだ開業前だが、数十年後のことを考えないこともない。うまくローンの返済が終わって髪の毛がすっかり白くなった頃、ウチはどうなっているんだろう。現在８歳の息子はどんな道に進んでいるのだろう。

医師の両親、祖父母がいる環境で育った私は自然に医師の道を目指すようになった。おそらく母が上手く導いてくれたのだろう。最近、息子の成長とともに、その難しさが改めて分かった。もちろん時代が違えば環境も変化するので、自分のときと息子のときは違う。自分ができたから子供もできるとは限らない。が、少なからず期待してしまうのが親心だ。

これから第二の人生が幕を開ける。厳しく育ててくれた母、温かく見守ってくれた父、底なしに甘やかせてくれた祖父母に感謝して船出としよう。